はしのはなし

VOL.6（令和元年6月）

発行：道路局橋梁課

第六稿
魅力ある親柱特集（中編）

「はしのはなし」では、皆さまに横浜の橋の歴史や小話を、定期的に紹介していきます。第6回目は、魅力ある親柱特集（中編）。今回は保土ケ谷・旭・磯子・金沢・港北・緑区から魅力ある、特徴的な親柱紹介したいと思います。

1　学校橋（保土ケ谷区）

学校橋の親柱

右岸上流より学校橋を望む。

現在の学校橋は当初架けられた木橋を昭和63年3月に架け替えたものになります。親柱の四隅には学校橋の名前に因み、こどもが親柱に乗っている意匠が採用されています。また、橋名板の文字は当時の道路局長が揮毫（きごう）したものです。

2　旭大橋（旭区）

旭大橋の親柱

北側より旭大橋を望む。

旭大橋は、「追分・矢指市民の森」という帷子川源流域がある自然豊かな森の谷戸に昭和63年3月に架けられた橋です。夏の夜には追分・矢指市民の森にホタルが飛ぶことから親柱や高欄の一部にはホタルのデザインが採用されています。

3　八幡橋（磯子区）

八幡橋の親柱

右岸下流より八幡橋を望む。

八幡橋は昭和3年3月に関東大震災の復興事業で架け替えられたものであり、磯子区では唯一現存する復興橋梁になります。復興橋梁の親柱は、その洗練された意匠が特徴のひとつとして挙げられます。写真のように、橋台から親柱が伸びていく構造により、親柱を一つの構造として独立させずに、橋と一体性のあるものとして設計されたものと考えられます。

4　瀬戸橋（金沢区）

瀬戸橋の親柱

上流右岸より瀬戸橋を望む。

現在の瀬戸橋は昭和63年3月に架け替えられたものです。橋の意匠は昭和初期の絵葉書を参考にしており、橋の歴史は古く、鎌倉時代まで遡ります。当時、付近の内海は流れが速く渡るにも難儀であったため、嘉永3年(1305年)鎌倉幕府の北条氏の命により、内海の出入り口に2つの島を築き、瀬戸橋が造営されたそうです。また、この橋の造営のために金沢区全域から「瀬戸橋造営棟別銭」を取り立てて作られたそうです。

5　稲坂橋（港北区）

稲坂橋の親柱

下流左岸より稲坂橋を望む。

稲坂橋は、パイプランガー橋というとても珍しい橋梁形式で、昭和57年2月に架けられた橋です。
親柱には竣工当時の港北区の形をした石材がつけられています。
現在は、当時の港北区の一部が都筑区に再編されたことから、港北区は石材とは異なる形をしており、区の歴史的変遷を感じることができます。

6　鴨池橋（緑区）

鴨池橋の親柱

下流右岸より鴨池橋を望む。

鴨池橋は平成3年3月に架けられた人道橋で、そのユニークなデザインから「かながわの橋100選」にも選ばれております。
特徴的な親柱は風見鶏をモチーフにしており、これは東京藝術大学名誉教授であり、東京スカイツリーのデザイン監修に携わったことでも有名である澄川喜一先生が親柱を含め高欄、照明、色彩等をトータルデザインで手掛けました。